【地域間交流推進校】

古代にチャレンジ　体験活動
山口市立小郡南小学校

学　校　の　概　要

①　学校規模

○　学級数：１８学級（内特別支援学級３学級）
○　児童数：４７４人
○　教職員数：３０人
○　活動対象学年：６年生・７９人

②　体験活動の観点などからみた学校環境

○　山口県の瀬戸内側の中央部に位置し、山口湾の干拓地跡に立地している。校区の中央に山陽本線が走り、新山口駅を有する。
○　古代より現在に至るまで、陸運・海運・鉄道など交通の要衝として開けてきた地域であり、文化財等多い地域である。
○　学校の歴史は浅く、児童数の増加に伴って平成４年に新山口駅の南側に新設された。校区は駅をはさんで南北に広がり近年駅南側の開発が進みマンションやアパートが林立するようになってきた。

③　連絡先

○　〒７５４－００１３
　　山口県山口市小郡緑町１－１
○　電　話　０８３－９７３－２５２１
○　ＦＡＸ　０８３－９７３－７５１６
○　ホームページ：
　　http:/www.c-able.ne.jp/~ohminami/
○　電子メール：

体　験　活　動　の　概　要

①　活動のねらい

○　自然の中での活動の心地よさや活動に必要な一連の道具を自分の力で作り出すことの喜びを体感させる。
○　家庭生活や学校生活では経験できにくい人や物との関わりを通して、豊かな関わりを築くコミュニケーション能力の育成を図る。
○　諸活動を通して、協力すること、相手を思いやること等を体感させるとともに他者との関わりを大切にしていこうとする態度を養う。

②　活動内容と教育課程上の位置付け

○　勤労生産に関わる体験活動
（総合的な学習の時間他　３０単位時間）

○　自然に関わる体験活動
（総合的な学習の時間他　　４単位時間）

○　文化や芸術に関わる体験活動
（総合的な学習の時間他　　５単位時間）

○　交流に関わる体験活動
（総合的な学習の時間他　　３単位時間）

１　活動に関する学校の全体計画

○　活動のねらい

（１）　国指定の長登銅山跡を有する美祢市美東町長登において、古代の人々の生活を体感することで生活用具を自分の力で作成していくことの喜びを味わわせたり、歴史への興味を持たせたりする。

（２）　自然の中での活動を通して、自然に触れる心地よさを感じたり、自然の大切さや環境への意識の向上を図る。

（３）　長登銅山についての説明を聞いたり文化財に触れたり、自分たちの地域との関わりを知ったりすることで、歴史への興味を持たせる。

○　全体の指導計画

（1）　活動の名称　　古代にチャレンジ

（2）　実施学年　　第６学年

活動内容・教育課程上の位置づけ・期間等（４２時間）

活動の名称	活　動　内　容	教育課程上の位置づけ	期間等
勤労生産に関わる体験活動	・土器作り　８時間 ・竹の食器作り　８時間 箸作り（２時間） コップ作り（６時間） ・火おこしについて知ろう　８時間 ・土器を使って炊飯　５時間	総合的な学習の時間 総合的な学習の時間 総合的な学習の時間 総合的な学習の時間	６月 ６月 ７月 １１月 １月
自然に関わる体験活動	・銅山跡周辺の自然観察　５時間	総合的な学習の時間	１１月
文化や芸術に関わる体験活動	・銅山についての歴史と鉱山跡の探検　８時間	総合的な学習の時間	１１月 １月

２　活動の実際

○　事前指導

・　社会科の歴史学習に登場する奈良の大仏と山口県との関係や美祢市美東町の長登銅山跡と自分たちの地域との関連について説明を受けたり自分たちで調べたりする活動を通して､意欲付けを行った。

・　担当教諭が現地スタッフとの打ち合わせを重ね、活動内容を具体化させることで、児童一人一人に日程や内容・ねらいをわかりやすくした。また、活動内容や方法についての紹介の仕方を工夫し、活動意欲を高めるようにした。

・　利用する施設についての説明やきまりやマナーについて指導し、規範意識を高めるようにした。

・　食事作りや物作りに必要な火の扱い方や刃物の使い方について、十分な時間をかけて指導し怪我につながらないように指導した。

○　活動の展開

６月の取り組み

竹を使っての箸作り

竹を使ってのコップ作り

土器のナベ作り

７月の取り組み

火おこしの道具を使った火種づくり

１１月の取り組み

火種から火へ

１１月の取り組み

長登銅山の説明

長登銅山探検

坑道探検

季節にふれる

ミニ大仏見学

１月の取り組み

土器のなべを使ってのご飯炊き

○　事後指導

ア　体験活動を通して行った学習や活動の記録を各グループ毎にまとめ、保護者を対象に発表会を開いた。

イ　児童の感想・反省から

色々な活動は見ているととても簡単に思えたが、実際にやってみると全然違っていて最初は全くできなかった。ただ、何度もやっていると少しずつ、こつがつかめるようになってきた。

知識と体験との融合には、小さな失敗の連続や練習の積み重ねが必要であることを児童一人一人が体感している。このことを、学校生活や家庭生活につなげることができるように指導していきたい。

３　体験活動の実施体制

○　学校支援委員会

学校支援委員会は、ＰＴＡ会長、校長、教頭、養護教諭、担当教諭や交流先の教育委員会職員等で組織した。今回の体験活動は６年生の総合的な学習の時間に設定しているために６年生の担任が中心となり計画・準備を行った。

また、担当教諭と交流先の教育委員会との綿密な打ち合わせや連絡調整を行うことで、体験活動の充実が図られた。

○　配慮事項等

ア　参加児童の健康観察

・事前の健康観察。最寄りの救急病院等の把握。

イ　その他安全に関する事項

・火の取り扱いや刃物の使い方等の指導。引率人数をボランティアを含め４～５人に設定し、児童の状況把握を細かくできるようにした。

４　体験活動の評価の工夫と指導の改善

ア　毎回の活動の終わりに、ふりかえりカードを利用し活動の感想や自己評価・相互評価を取り入れ、次の活動の修正の資料とした。

イ　児童の自己評価だけでなく「意欲」・「技能」・「態度」等の評価項目を設定し、引率教員の評価を行った。

５　活動の成果と課題

○　成果

今回の体験活動を通して、児童は「分かることと出来ることの違い」「自分の力で苦労して作り出す喜びや、作った物への愛着」「友達との関わりの楽しさ」などを体感することができたようである。以前より友達との関わりが密になると同時に、児童一人一人が自分で考えて行動できるようになってきた。

○　課題

児童の実態に応じて何を体験させ、どう学ばせるか、そして学習成果を学校や家庭、地域での生活にどう結びつけていくか見通しをもつことが大切である。さらに、児童の意欲の持続、具体的な働きかけや環境作りが重要である。